

第5章 第5期(通常期)における勤務実態

1. 第5期の調査協力校の概況

第5期の調査期間は、平成18年10月23日(月)から平成18年11月19日(日)までの4週間である。

第5期において回答のあった343校のうち小学校1校が10月20日(金)から10月23日(月)までの期間に、児童・生徒の秋季休業期(以下、「秋季休業期」)を含んでいた。このうち第5期の調査と重なる日には10月23日(月)の1日のみである。

通常期と秋季休業期では、教員の業務における質と量に違いがあると考えられるため、第5期については、調査協力校の秋季休業期間の情報をもとに、データを通常期と秋季休業期の2つの時期に分割した。ただし、秋季休業期のある学校は1校であり、対象となる日にちも1日と少ないため、第5期では通常期のみについての報告を行う。

2. 残業時間・持帰り時間および業務の内訳

(1) 全体的な残業時間・持帰り時間の実態

まず第5期(通常期)の勤務日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-5-1)。

小学校では、残業時間量は平均で1時間41分、持帰り時間量は平均33分、これらを合わせた時間の平均は2時間14分である。

中学校では、残業時間量は平均2時間08分、持帰り時間量は平均20分、これらを合わせた時間の平均は2時間29分である。

また、小学校と中学校を比べてみると、勤務日の残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも27分長い。しかし、持帰り時間の平均は小学校の方が中学校よりも13分長い。中学校では部活動があるために残業時間が長くなると考えられるが、中学校での残業時間・持帰り時間における業務内訳については、後の第3項において検討する。

次に、第5期(通常期)の休日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-5-2)。

小学校では、残業時間は平均で21分、持帰り時間は平均で1時間20分、これらを合わせた時間は平均で1時間42分である。残業時間の中央値が0分であることからわかるように、小学校では基本的に休日に学校で業務を行っていないといえる(表2-5-2)。

中学校では、残業時間は平均1時間27分、持帰り時間は平均1時間31分、合計は平均で2時間59分となっている。中学校の休日の残業時間と持帰り時間で中央値と平均値の差が40分から50分ほどひらいていることからわかるように、中学校では、休日に残業や持帰り仕事をする人の間で、時間量の差が大きい(表2-5-2)。これは後の、図2-5-3や図2-5-4からも確認できる。

小学校と中学校を比べてみると、残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも1時間06分長い。小学校と中学校それぞれの残業時間における業務内訳については、後の第3項で述べるが、中学校においては部活動を行っているために長くなると考えられる。

以上、第5期(通常期)の勤務日と休日を比べてまとめておこう。

小学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも1時間08分長く(表2-5-1)、休日においては、持帰り時間の方が残業時間よりも約1時間長い(表2-5-2)。特に持帰り時間については、勤務日よりも休日の方が1時間弱長くなっており、休日には学校で仕事をしないものの、自宅で持帰り仕事を行っている様子がうかがえる(表2-5-1、表2-5-2)。

中学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも1時間48分長く(表2-5-1)、休日においては、残業時間と持帰り時間はほぼ同じ長さである(表2-5-2)。持帰り時間については、勤務日よりも休日の方が1時間11分長い(表2-5-1、表2-5-2)。

表2-5-1 勤務日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	1時間41分 〔1時間31分〕(1.026)	33分 〔18分〕(0.681)	2時間14分 〔2時間06分〕(1.221)
中学校	2時間08分 〔2時間01分〕(1.169)	20分 〔7分〕(0.544)	2時間29分 〔2時間21分〕(1.291)
全体	1時間56分 〔1時間47分〕(1.130)	26分 〔11分〕(0.621)	2時間22分 〔2時間14分〕(1.265)

[]内は中央値、()内は標準偏差を示す。

表2-5-2 休日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	21分 〔0分〕(0.801)	1時間20分 〔1時間00分〕(1.391)	1時間42分 〔1時間21分〕(1.557)
中学校	1時間27分 〔33分〕(2.025)	1時間31分 〔53分〕(1.837)	2時間59分 〔2時間34分〕(2.452)
全体	57分 〔0分〕(1.676)	1時間26分 〔56分〕(1.650)	2時間23分 〔1時間53分〕(2.185)

[]内は中央値、()内は標準偏差を示す。

(2)個人単位でみた残業時間・持帰り時間の実態

前項では、第5期(通常期)の教員全体における残業時間量・持帰り時間量の平均に注目した。しかし、すべての教員が一様に残業や持帰り仕事を行っているわけではなく、これらの時間は、教員間での差が大きいと考えられる。そこで、第5期(通常期)における教員一人あたりの平均残業時間量・持帰り時間量の分布をみたものが、図2-5-1から図2-5-4である。

以下、勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、それぞれ小学校、中学校の結果を検討していく。

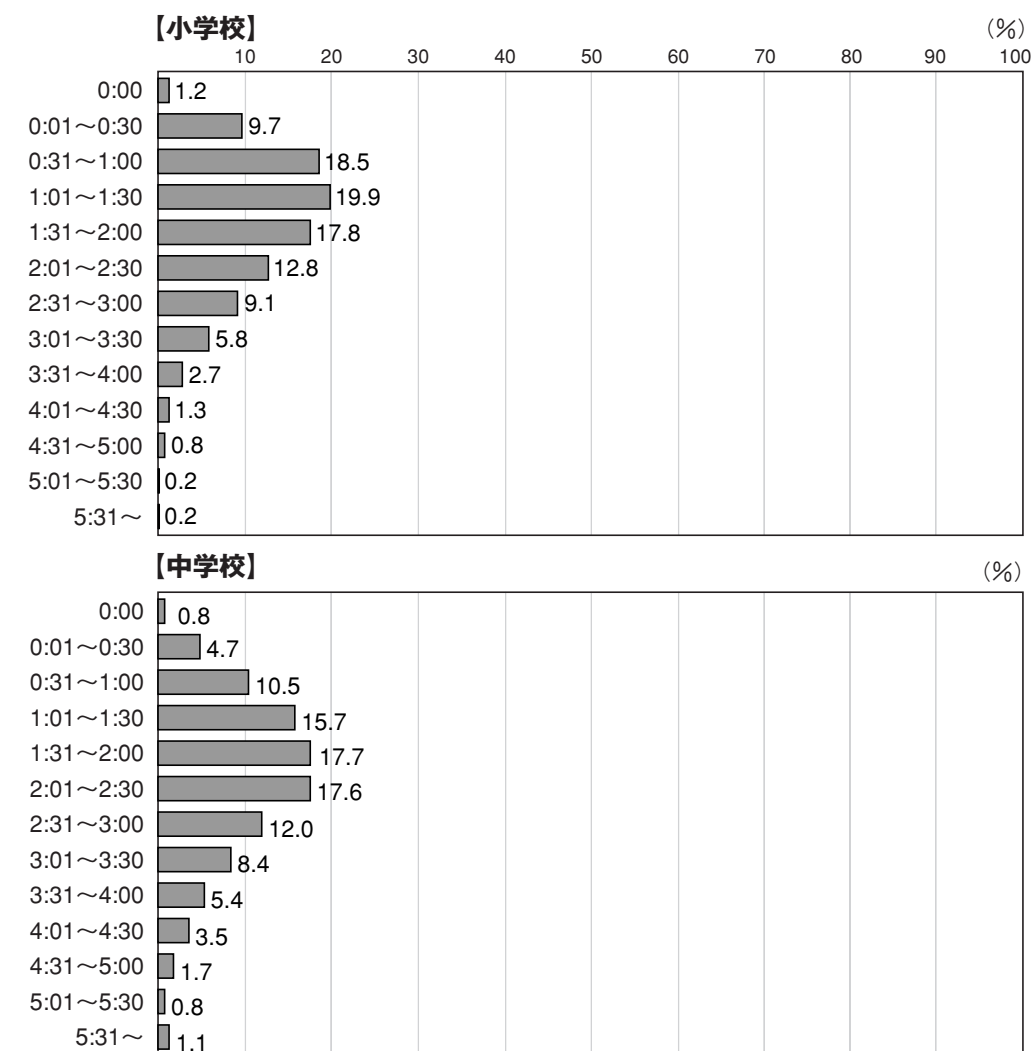
まず、第5期(通常期)の勤務日における平均残業時間量について検討しよう(図2-5-1)。

小学校の勤務日における残業時間の分布は、0分が1.2%で、残業を行わない教員はほとんどいない。残業時間が30分以下(0分をのぞく)は9.7%、31分～1時間以下は18.5%となっており、約30%の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。また、残業が1時間01分～1時間30分以下の教員は19.9%、1時間31分～2時間以下の教員は17.8%と、2時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員が6割強である。また、2時間01分～2時間30分以下の教員は12.8%、2時間31分～3時間以下の教員は9.1%、さらに、3時間を超える残業を行う教員も約1割いる。

中学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が0.8%で、残業を行わない教員はほとんどいない。残業時間が30分以下(0分をのぞく)は4.7%、31分～1時間以下は10.5%となっており、約16%の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。これに対して、残業が1時間01分～1時間30分以下の教員は15.7%、1時間31分～2時間以下の教員は17.7%と、2時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員はおよそ5割弱である。また、2時間01分～2時間30分以下の教員は17.6%、2時間31分～3時間以下の教員は12.0%である。3時間を超える残業を行う教員は2割ほどである。

以上から小学校・中学校いずれにおいても、勤務日にはほとんどの教員が残業を行っており、残業時間については、小学校では65.9%の教員が2時間以下(0分をのぞく)の残業を行っていることがわかる。一方、中学校では2時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員は5割弱であり、小学校よりも中学校の方が概して残業時間が長い傾向にあるといえる。

図2-5-1 勤務日・1日あたりの平均残業時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01～1:30」は「1時間01分～1時間30分」。

次に、第5期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量について検討しよう(図2-5-2)。

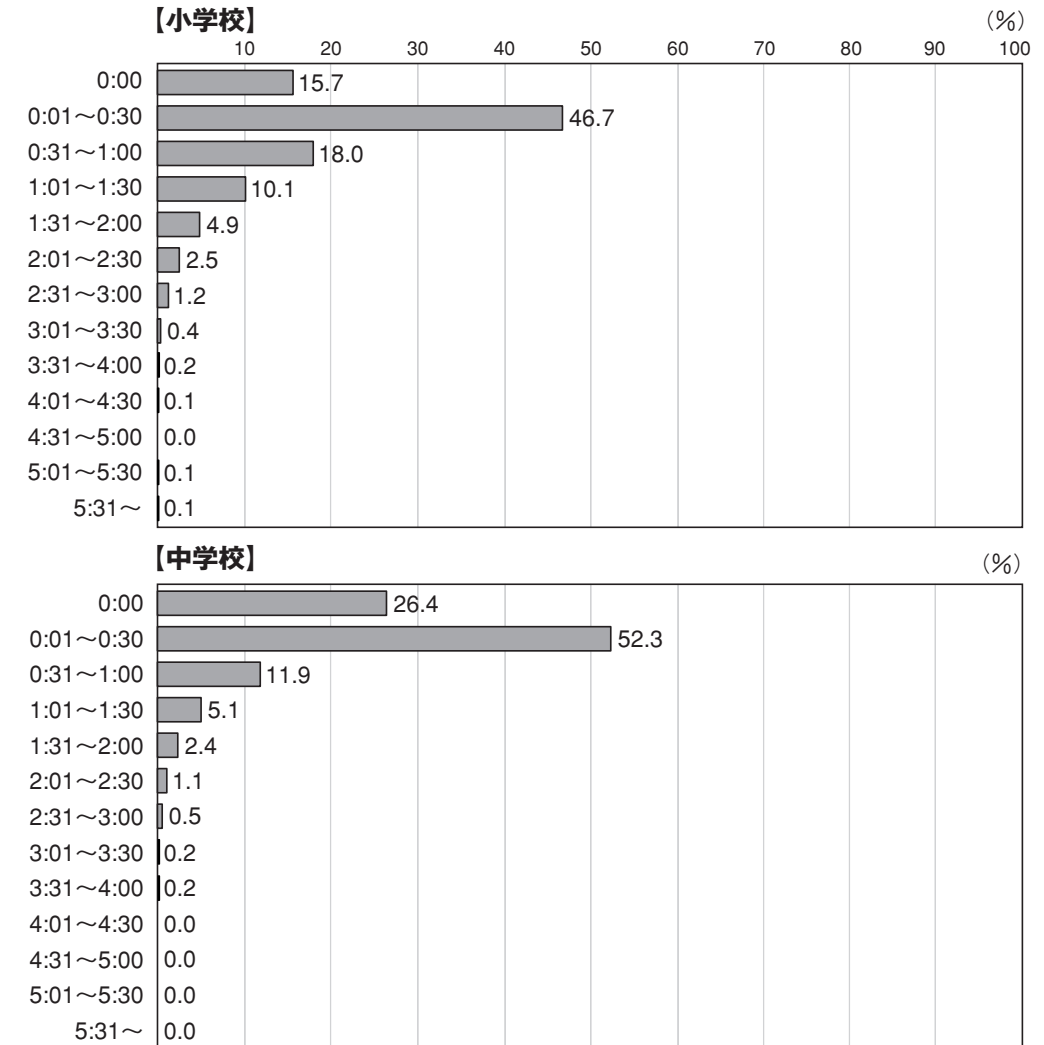
小学校の勤務日における平均持帰り時間の分布について検討すると、0分つまり持帰り仕事を行わない教員は15.7%存在する。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は46.7%、31分~1時間以下は18.0%であり、およそ65%の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。1時間を超える持帰り仕事をやっている教員は2割いる。

中学校の勤務日における平均持帰り時間の分布は、0分が26.4%で、持帰り仕事を行わない教員はおよそ4人に1人である。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は52.3%、31分~1時間以下は11.9%であり、6割強の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をやっている。1時間を超える持帰り仕事をやっている教員は1割である。

以上、第5期(通常期)の勤務日について、勤務日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では15%ほど、中学校では26%ほどいる。また、小学校・中学校いずれにおいても、6割強の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をやっている。

第5期(通常期)の勤務日の残業時間・持帰り時間の実態についてまとめると、残業を行っていない教員はほとんどおらず、小学校では6割強、中学校では5割弱の教員が2時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている(図2-5-1)。持帰り仕事をやっていない教員は小学校では15%ほど、中学校では26%ほどとなっているが、持帰り仕事がある教員の方が多数派であり、小学校・中学校ともに6割強の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をやっている(図2-5-2)。

図2-5-2 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

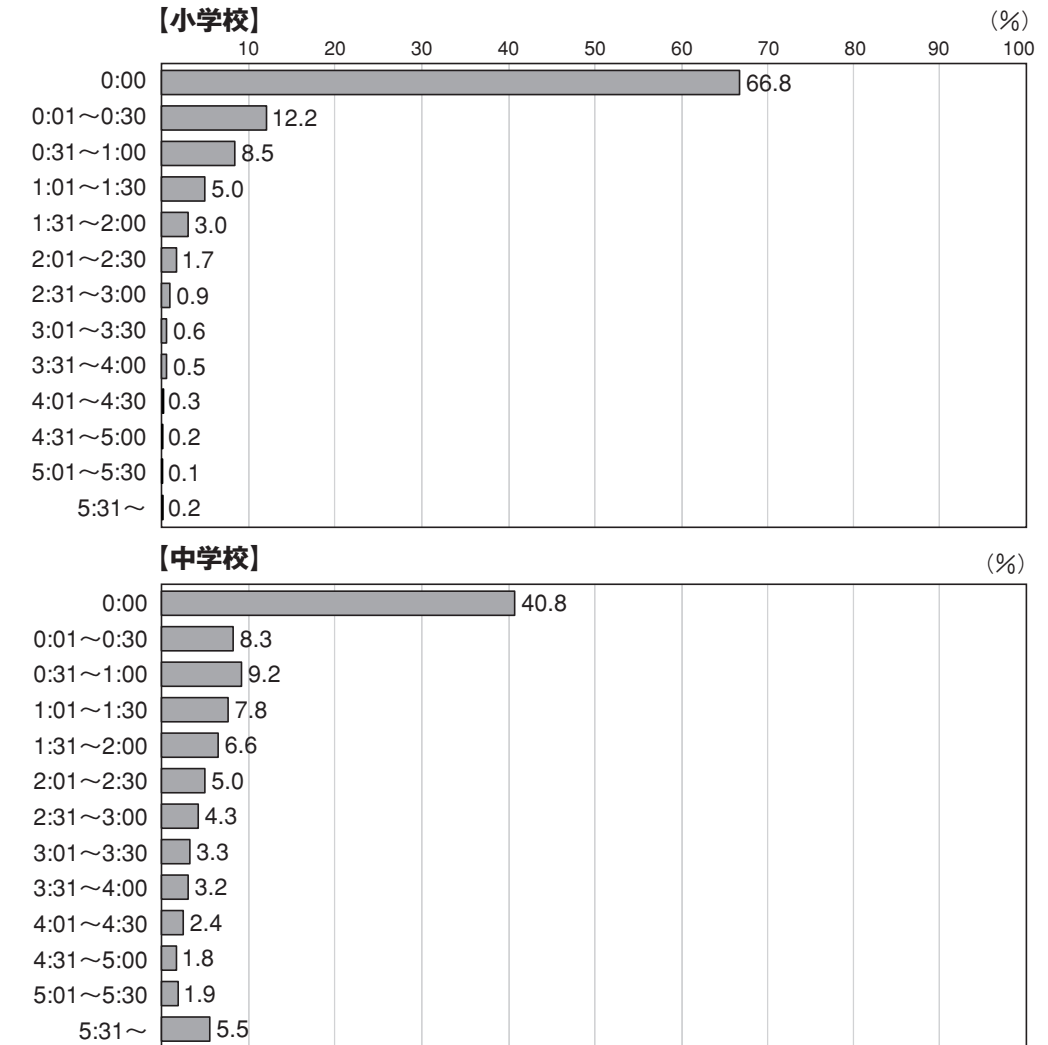
次に、第5期(通常期)の休日における平均残業時間量について検討しよう(図2-5-3)。

小学校の休日における平均残業時間の分布は、0分が66.8%で、残業を行わない教員は7割弱である。しかし、1時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員は2割、1時間01分～3時間以下の残業を行う教員も1割ほどいる。

中学校の休日における平均残業時間の分布は、0分が40.8%で、残業を行わない教員は4割いる。勤務日(図2-5-1)に比べると残業を行う教員は少ないが、およそ6割の教員が休日も学校に出勤して残業を行っているといえる。また、小学校よりも休日に残業を行う教員が多い。残業時間は教員間での差が大きく、残業時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員が約18%、1時間01分～2時間以下の教員が約14%、2時間01分～3時間以下の教員が1割、3時間01分～5時間以下の教員が1割、さらに5時間を超える教員も1割弱存在する。なかでも休日に学校で5時間30分を超える勤務を行う教員が5%以上存在するのは、小学校にはない中学校だけの特徴であるといえる。業務の内訳としては部活動などが考えられるが、実際に中学校の教員が休日の残業時間にどのような業務を行っているのかは、後の第3項において検討を行う。

以上、第5期(通常期)の休日の残業時間について、休日に残業を行わない教員は小学校では7割弱、中学校では4割ほど存在する。また、特に中学校では、残業時間の個人差が大きく、幅広い時間帯に分布している。

図2-5-3 休日・1日あたりの平均残業時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01～1:30」は「1時間01分～1時間30分」。

次に、第5期(通常期)の休日における平均持帰り時間量について検討しよう(図2-5-4)。

小学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が19.3%で、勤務日(図2-5-2)よりもやや多くなっている。休日でも8割の教員が持帰り仕事を行っており、その時間は教員間での差が大きい。持帰り時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員は31.7%、1時間01分~2時間以下の教員は24.6%、2時間01分~3時間以下の教員は13.6%、3時間01分~5時間以下の教員は8.5%、さらに5時間を超える教員は2.4%存在する。

中学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が25.0%で、勤務日(図2-5-2)とそれほど大きな差はない。休日でも8割弱の教員が持帰り仕事を行っており、その時間は教員間で差が大きい。持帰り時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員は3割弱、1時間01分~2時間以下の教員は約17%、2時間01分~3時間以下の教員は1割強、3時間01分~5時間以下の教員は1割強、さらに5時間を超える教員も5.6%存在する。

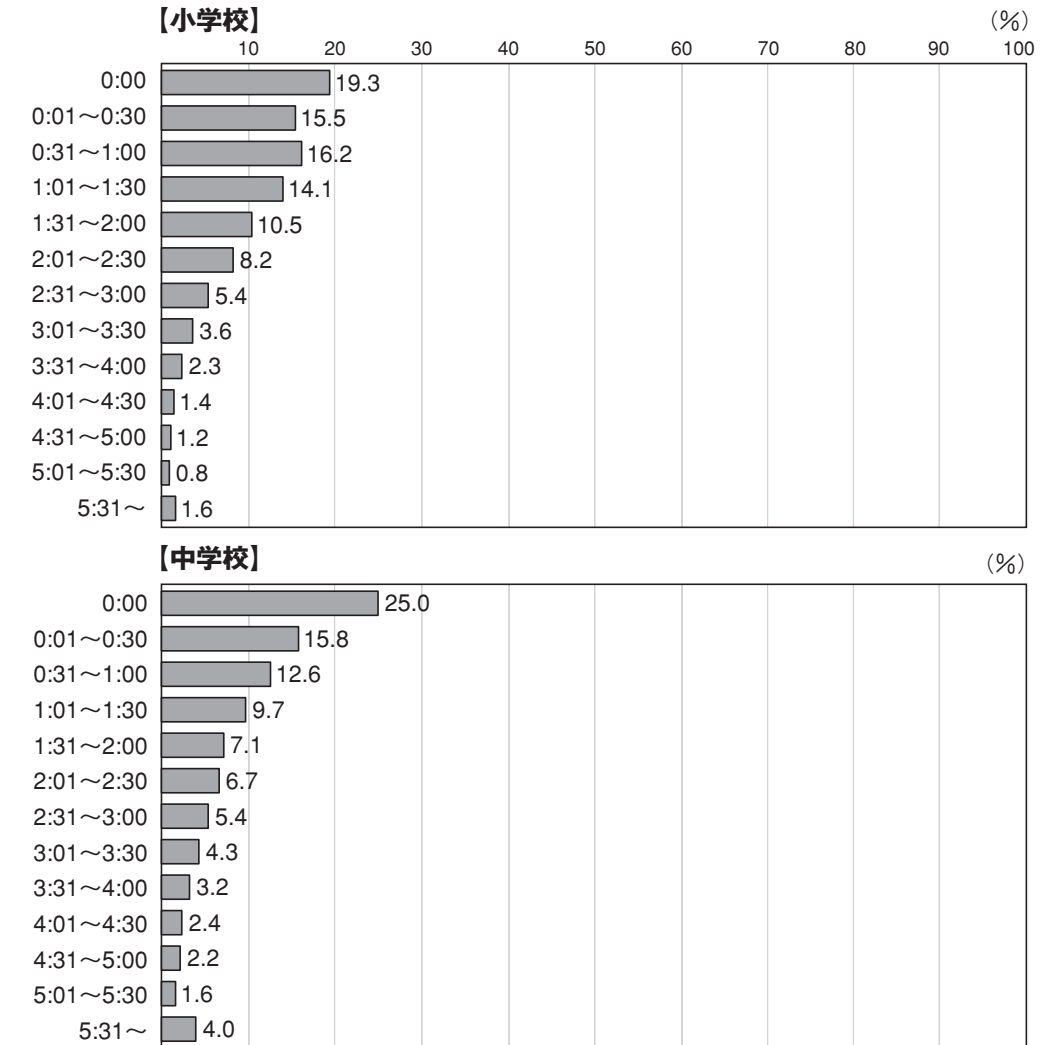
以上、第5期(通常期)の休日の持帰り時間について、休日に持帰り仕事を行わない教員は小学校・中学校ともに2割ほど存在する。また、小学校・中学校いずれにおいても、持帰り時間は教員間で差が大きく、5時間を超える教員も小学校では2.4%、中学校では5.6%存在する一方で、30分以下(0分をのぞく)と短時間の教員も15%ほど存在する。

第5期(通常期)の休日の残業時間・持帰り時間の実態についてまとめると、残業時間については、休日に残業を行わない教員は小学校では7割弱、中学校では4割ほど存在する。また、中学校では、残業を行う教員においては、教員間で残業時間の差が大きい(図2-5-3)。持帰り時間については、休日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では2割弱、中学校では2割5分存在する。また、小学校・中学校いずれにおいても、持帰り時間は教員によって差が大きい(図2-5-4)。

以上から、次のことが指摘できる。

第5期(通常期)においては、勤務日にはほとんどの教員が残業を行っており、小学校では6割強の教員が2時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている(図2-5-1)。休日には残業を行う教員は小学校では3割強、中学校では6割ほどで、中学校の残業時間には個人差がある(図2-5-3)。持帰り仕事を行う教員の割合は、小学校・中学校のいずれにおいても、勤務日では30分以下(0分をのぞく)の割合が多く(図2-5-2)、休日では0分が最も多く、時間が増えるにつれて割合が減少する傾向がある。一方で、中学校には休日の持帰り時間が5時間30分を超える教員も4.0%存在する(図2-5-4)。小学校・中学校いずれにおいても、勤務日の持帰り時間は過半数が1時間以下(0分をのぞく)に集中するが(図2-5-2)、休日の持帰り時間は、教員間で差が大きい(図2-5-4)。

図2-5-4 休日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

(3) 残業時間・持帰り時間における業務内訳

前項では、第5期(通常期)における教員一人あたりの平均の残業時間量・持帰り時間量の分布について注目したが、本項ではこれらの時間にどのような業務を行っているのか、業務の内訳を検討する。

第5期(通常期)における勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校のそれぞれで業務の上位5種類の内訳を検討していこう。

まず、第5期(通常期)の勤務日について検討しよう(表2-5-3、表2-5-4)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校・中学校ともに最も長いのは授業準備であり、小学校で30分、中学校で23分である。小学校で2番目に長いのは成績処理で11分、つづいて事務・報告書作成が9分、会議・打合せが7分である。中学校では2番目に長いのは部活動・クラブ活動で13分、つづいて事務・報告書作成と会議・打合せが11分となっている。ここから、小学校・中学校ともに残業時間における業務内訳は、授業準備が最も長く、中学校の部活動・クラブ活動をのぞくと、成績処理や事務・報告書作成などの事務作業の時間が長いといえる(表2-5-3)。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校・中学校いずれにおいても最も長いのは授業準備で、小学校では15分、中学校では6分である。2番目に長い業務は、小学校・中学校ともに成績処理で、小学校では6分、中学校では3分である。3番目から5番目に長い業務は、順番は異なるものの小学校・中学校ともに、学年・学級経営、事務・報告書作成、その他の校務が1~3分ずつとなっている(表2-5-4)。

次に、第5期(通常期)の休日について検討しよう(表2-5-5、表2-5-6)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校では授業準備が最も長く4分、以下、保護者・PTA対応が3分、部活動・クラブ活動、その他の校務、事務・報告書作成が2分ずつである。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く60分、つづいて授業準備、その他の校務が4分である。以下、成績処理、事務・報告書作成が2分である。中学校の部活動・クラブ活動をのぞき、残業時間は、小学校・中学校ともに5分以下と短い(表2-5-5)。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校では授業準備が最も長く32分、つづいて成績処理が12分、事務・報告書作成が7分、その他の校務、学年・学級経営が5分である。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く36分、つづいて授業準備が16分、成績処理が13分である。以下、事務・報告書作成、その他の校務が5分ずつである。休日の平均持帰り時間における業務内訳は、成績処理や授業準備が長く、中学校では部活動・クラブ活動の時間が長い傾向があるといえる(表2-5-6)。

小学校・中学校いずれにおいても、休日の業務は、学校での残業についても自宅での持帰り仕事についても、授業準備の時間が長くなっている。ただし、休日の残業時間と持帰り時間では業務に費やす時間が異なる。たとえば、小学校では休日の残業時間における授業準備は4分であるのに対し、休日の持帰り時間においては32分と増加する。また、中学校では休日の残業時間における授業準備は4分であるのに対し、休日の持帰り時間においては16分と増加する。ここから、中学校の部活動・クラブ活動をのぞくと、休日の業務は学校で行うよりも持帰り仕事として、自宅でより長い時間をかけて行っていることがわかる。

表2-5-3 勤務日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
1	授業準備	30分	授業準備	23分	授業準備	26分
2	成績処理	11分	部活動・クラブ活動	13分	事務・報告書作成	10分
3	事務・報告書作成	9分	事務・報告書作成	11分	成績処理	10分
4	会議・打合せ	7分	会議・打合せ	11分	会議・打合せ	10分
5	学校経営	7分	学校行事	9分	学校経営	8分

表2-5-4 勤務日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
1	授業準備	15分	授業準備	6分	授業準備	10分
2	成績処理	6分	成績処理	3分	成績処理	4分
3	学年・学級経営	3分	事務・報告書作成	1分	学年・学級経営	2分
4	事務・報告書作成	2分	学年・学級経営	1分	事務・報告書作成	2分
5	その他の校務	1分	その他の校務	1分	その他の校務	1分

表2-5-5 休日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
1	授業準備	4分	部活動・クラブ活動	60分	部活動・クラブ活動	33分
2	保護者・PTA対応	3分	授業準備	4分	授業準備	4分
3	部活動・クラブ活動	2分	その他の校務	4分	その他の校務	3分
4	その他の校務	2分	成績処理	2分	保護者・PTA対応	2分
5	事務・報告書作成	2分	事務・報告書作成	2分	事務・報告書作成	2分

表2-5-6 休日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
1	授業準備	32分	部活動・クラブ活動	36分	授業準備	23分
2	成績処理	12分	授業準備	16分	部活動・クラブ活動	21分
3	事務・報告書作成	7分	成績処理	13分	成績処理	12分
4	その他の校務	5分	事務・報告書作成	5分	事務・報告書作成	6分
5	学年・学級経営	5分	その他の校務	5分	その他の校務	5分

3. 属性別にみた残業時間・持帰り時間

前節では、第5期(通常期)における平均の残業時間量・持帰り時間量の全体像を検討した。

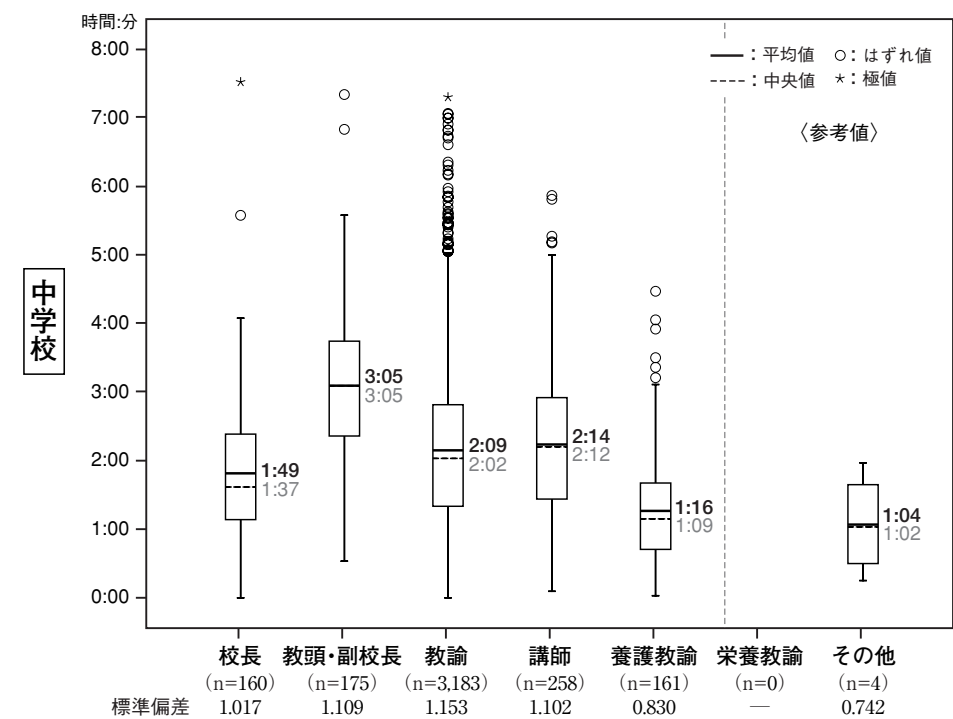
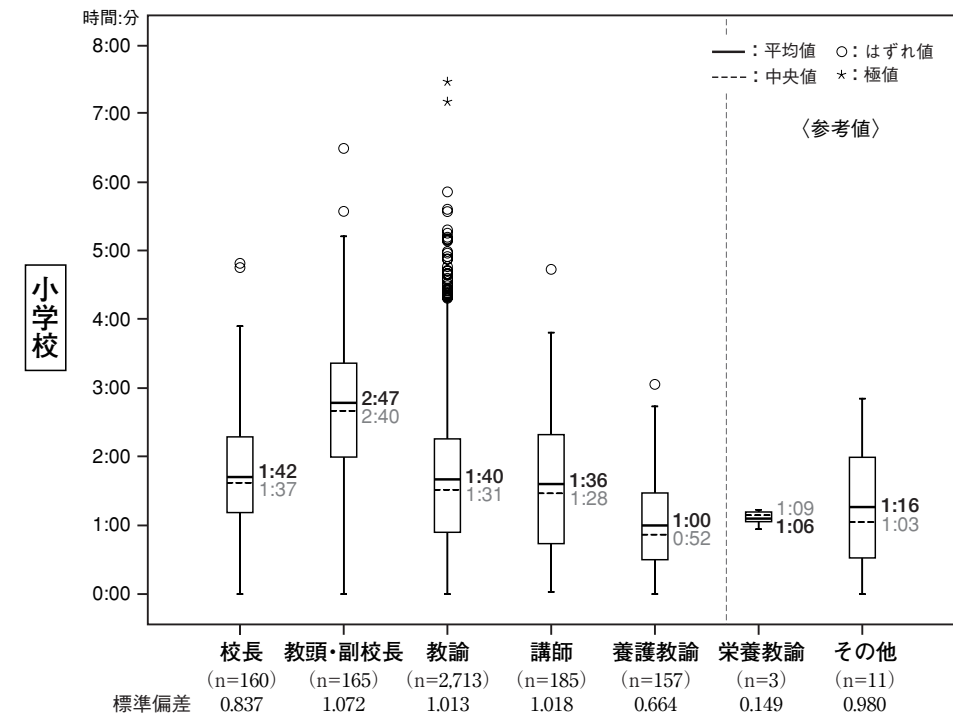
しかし、一人一人の残業時間量・持帰り時間量や、正規の勤務時間に処理できない業務を学校で行うのか、自宅で持帰り業務として行うのかといった勤務実態は、教員の性別や職階、年齢などの属性によって異なると考えられる。

そこで本節では、特に勤務日に絞り、属性別(職階別、性別、年齢別)に残業時間量・持帰り時間量の実態を明らかにする。

まずは職階別に、平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校のそれぞれについて検討しよう。

第5期(通常期)の勤務日における平均残業時間量は、図2-5-5の通り、小学校の教頭・副校長は2時間47分、中学校の教頭・副校長は3時間05分であり、他の職階に比べて大幅に長くなっている。その他の職階については、小学校では校長は1時間42分、教諭は1時間40分、講師は1時間36分と、ほとんど差はない。中学校では校長は1時間49分で、教諭は2時間09分、講師は2時間14分と、校長よりも教諭・講師の方が20～25分長くなっている。

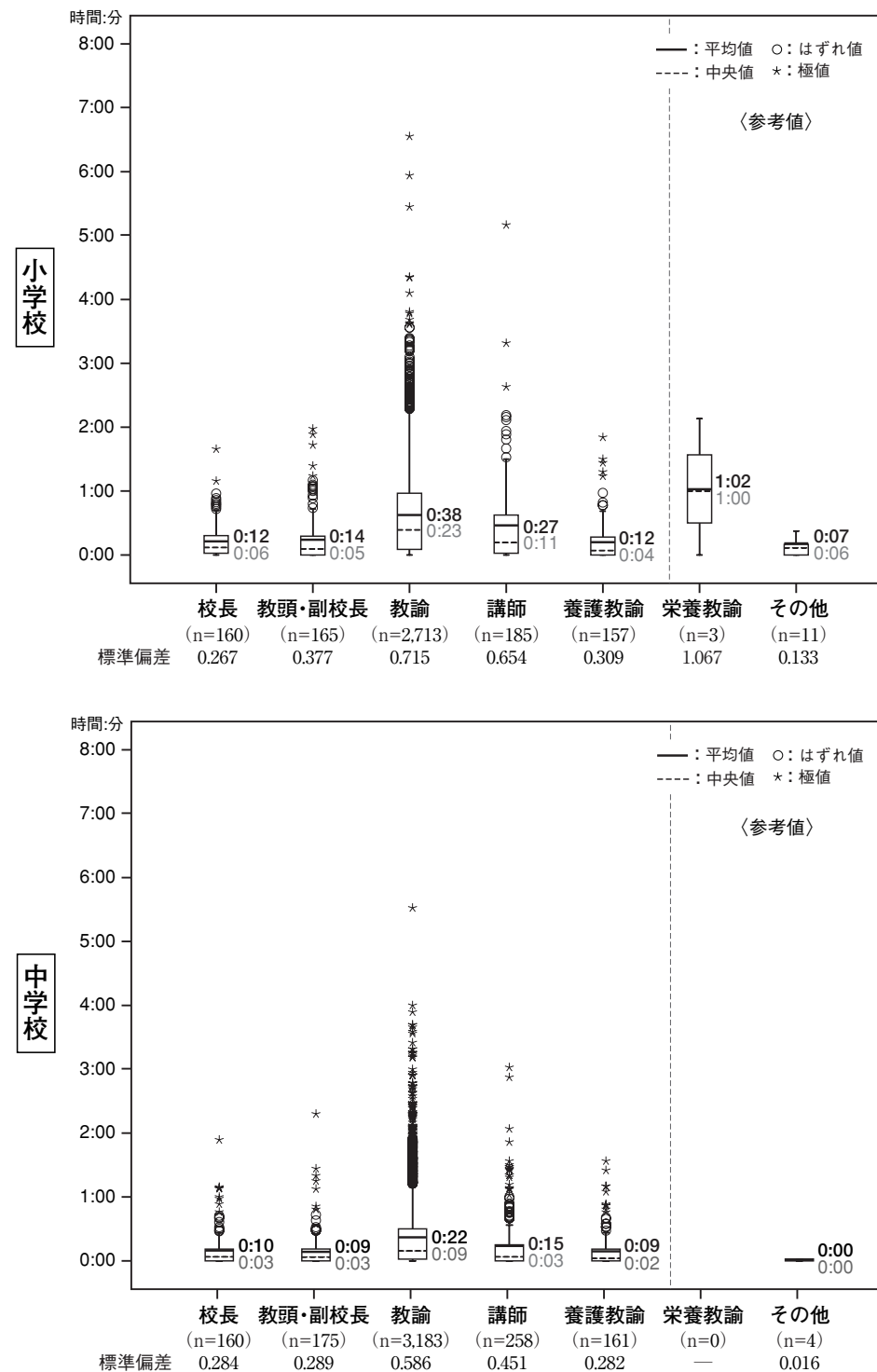
図2-5-5 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 職階別)



第5期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量は、図2-5-6のように、小学校・中学校とも教諭で最も長くなっている。小学校と中学校を比較してみると小学校の教諭の方が38分と長く、中学校の教諭は22分と短くなっている。小学校では、教諭につづいて長いのが、講師の27分、次に教頭・副校長の14分、校長、養護教諭の12分である。中学校では、教諭につづいて長いのが講師の15分であり、次が校長の10分である。

図2-5-5と図2-5-6の比較から、勤務日においては、学校では教頭・副校長が長く残業を行い、自宅では教諭が長く持帰り仕事を行っているといえる。

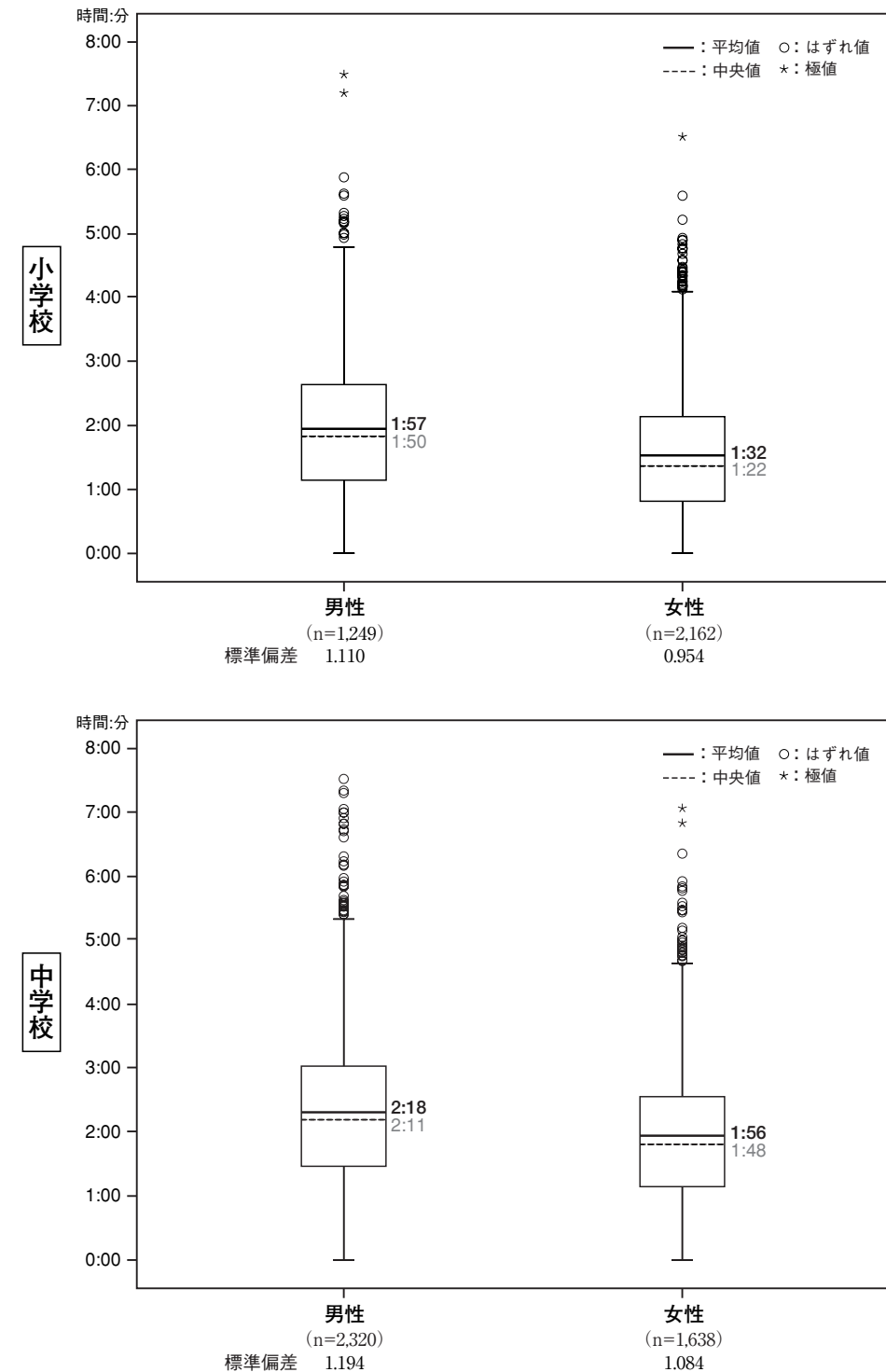
図2-5-6 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 職階別)



次に、性別ごとに平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校それぞれについて検討しよう。

第5期(通常期)の勤務日における平均残業時間量は図2-5-7の通り、小学校・中学校ともに男性の方が女性教員よりも25分ほど長くなっている(平均値は次の通り/小学校:男性教員 1時間57分、女性教員 1時間32分、中学校:男性教員 2時間18分、女性教員 1時間56分)。

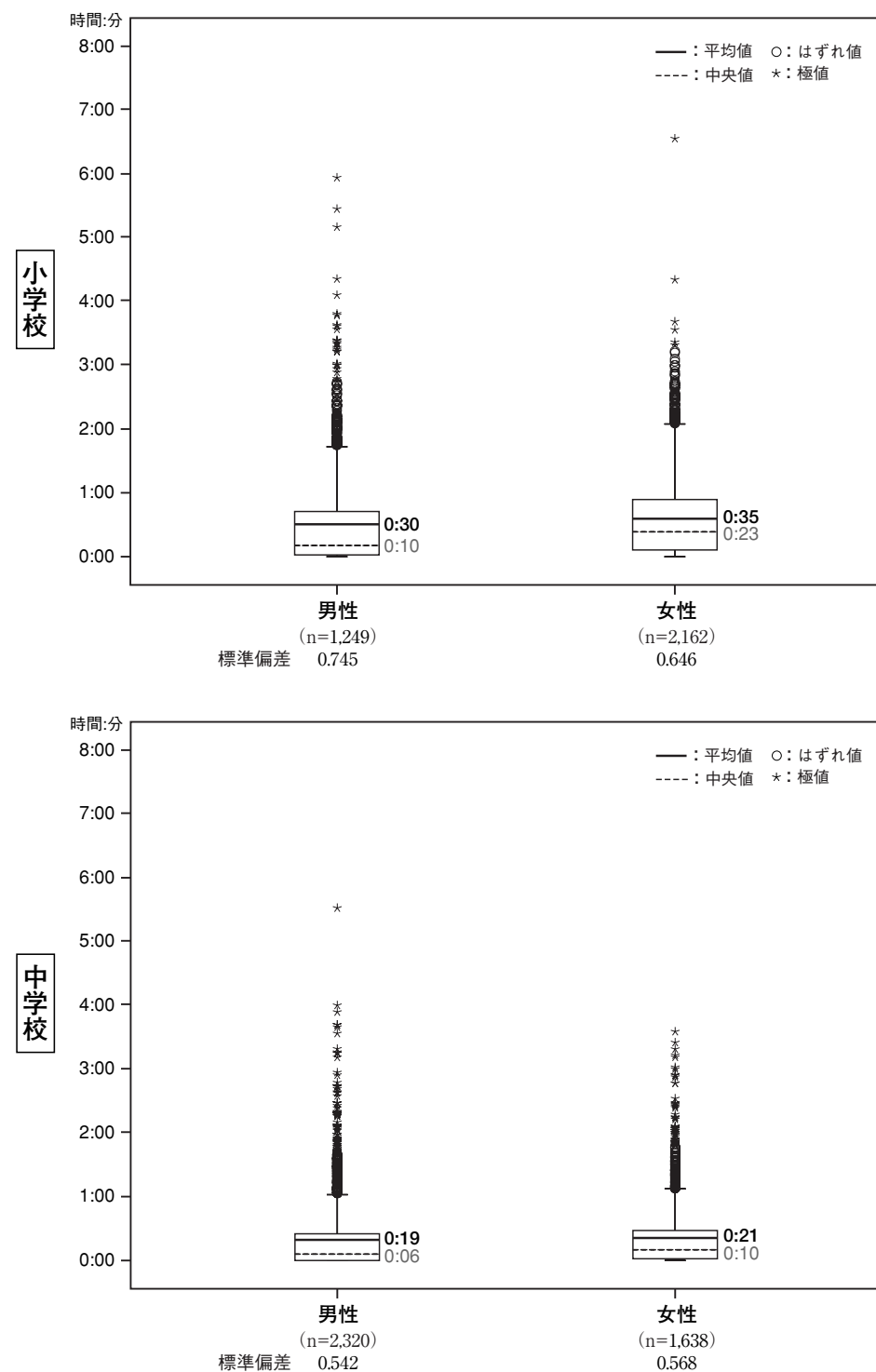
図2-5-7 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 性別)



これに対して平均持帰り時間量は図2-5-8の通り、小学校・中学校ともに女性教員の方が男性教員よりもやや長くなっている(平均値は次の通り/小学校:男性教員 30分、女性教員 35分、中学校:男性教員 19分、女性教員 21分)。

また、平均残業時間量については中学校の方が長く(図2-5-7)、平均持帰り時間量については小学校の方がやや長いこと(図2-5-8)を考え合わせると、中学校の教員は学校で残業を行い、小学校の教員は自宅で持帰り仕事を行う傾向があるといえる。

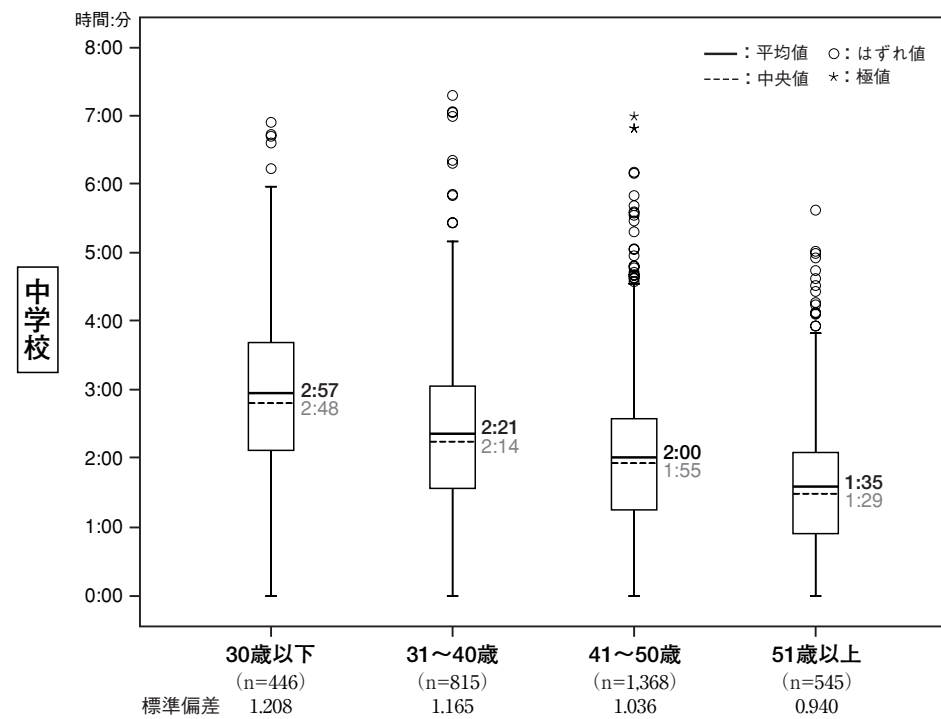
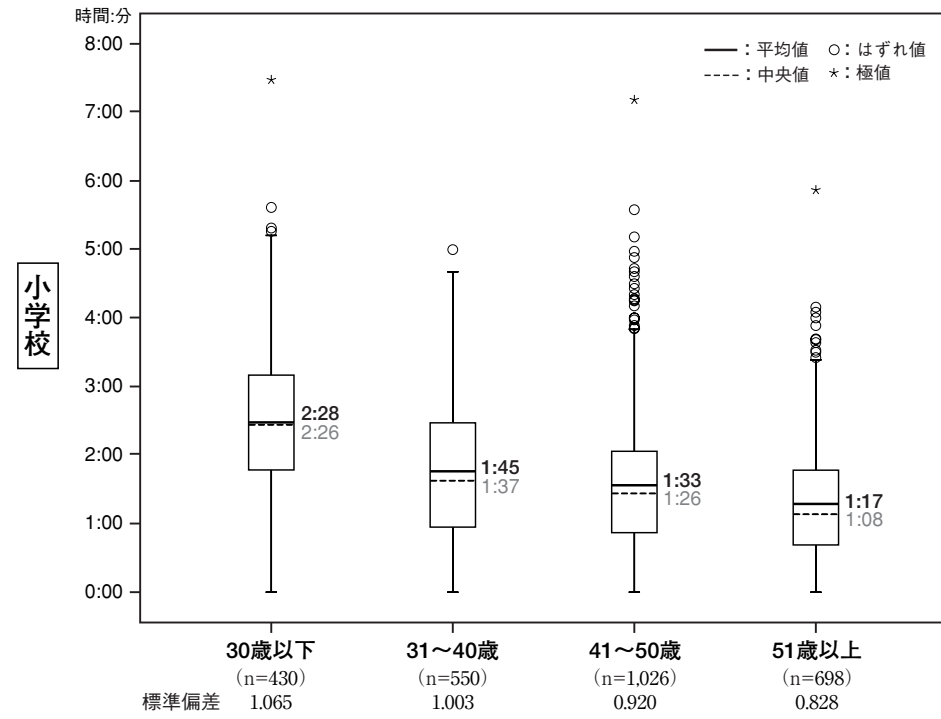
図2-5-8 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 性別)



最後に、年齢別に平均の残業時間量・持帰り時間量の実態をみてみよう。ただし、この場合、職階の影響をのぞく必要がある。たとえば 51歳以上には管理職が多く、この年齢層で残業時間・持帰り時間が長い場合は、年齢の影響だけではなく職階の影響も考えられる。そこで、教諭のみを取り出し、教諭の年齢別で残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校について分析を行う。

第5期(通常期)の勤務日における教諭の平均残業時間量は、小学校・中学校ともに30歳以下で最も長く、小学校では2時間28分、中学校では2時間57分である(図2-5-9)。しかし、年齢層が上がるにつれて平均残業時間は減少する。小学校では31~40歳で1時間45分、41~50歳で1時間33分、51歳以上で1時間17分である。中学校では31~40歳で2時間21分、41~50歳で2時間00分、51歳以上で1時間35分である。ここから、年齢層の高い、いわゆるベテラン教諭になるほど平均残業時間が減少していくといえる。この原因は、経験を積むことによって授業などの準備時間が短縮できることや、若い年齢層ほど部活動などの業務が任されることなどが考えられる。

図2-5-9 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 教諭の年齢別)



第5期(通常期)の勤務日における教諭の平均持帰り時間量は、小学校・中学校いずれにおいても30歳以下で最も短い。小学校では30歳以下で30分、31~40歳で39分、41~50歳で40分、51歳以上で38分である。中学校では年齢によってあまり差はなく、30歳以下で17分、31~40歳で24分、41~50歳で24分、51歳以上で21分である(図2-5-10)。

勤務日における平均の残業時間と持帰り時間を比べると、小学校・中学校いずれにおいても、残業時間は年齢層が上がるにしたがって減少する。これに対して持帰り時間は30歳以下で最も時間が短く、その他の年齢ではあまり差がみられない(図2-5-9、図2-5-10)。

図2-5-10 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 教諭の年齢別)

